

復刊

いざみ

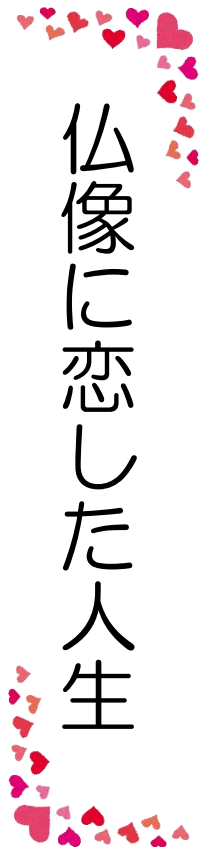


所沢図書館だより
復刊40号(通巻118号)
題字 高橋 玄洋 氏

目次

- P.1 仏像に恋した人生
- P.2-4 児童文学講演会 講演録
- P.5 対面朗読をご存じですか？
- P.6 図書館長のつぶやき

仏像に恋した人生



こんにちは、仏像イラストレーター・文筆家の田中ひろみです。所沢市在住ですが、「奈良の仏像」の本を書いたことがきっかけで、奈良市観光大使も務めています。

子どもの頃からイラストレーターになるのが夢でしたが、両親の勧めでまず正看護師の資格を取得し、看護師として働きました。退職後、貯めたお金で絵の学校に通い、卒業後は小説家のアシスタントとして取材や文章の書き方を学び、フリーのイラストレーター・ライターとして活動を始めました。

仏像に魅了されたのは大人になってからです。子どもの頃、仏像好きの叔父によく奈良や京都へ連れて行ってもらいましたが、その頃はまったく興味がありませんでした。しかし大人になって久しぶりに京都・三十三間堂を訪れ千体の千手観音を目の前にした瞬間、突然仏像に恋に落ちたのです。なぜ惹かれたのかは自分でもうまく説明できませんが、幼い頃から見てきた仏像への

興味が長い年月を経て花開いたのかも知れません。それ以来、日本全国の寺院を巡り、多くの仏像を拝観してきました。そして仏像の魅力をもっと多くの人に伝えたいと思い、イラストと文章を使って仏像をわかりやすく紹介する本を多数執筆しています。著書は74冊にのぼります。

仏像は知らないとは同じように見えるかもしれませんが、人間と同じように一体一体に個性があります。

仏像は大きく「如来」「菩薩」「明王」「天」の4種類に分けられます。悟りを開いた姿の「如来」、如来を目標として修行する華やかな姿の「菩薩」、怖い表情で人々を導く「明王」、そして仏教を守護する元はインドの神様の「天」です。こうした違いがわかると仏像拝観はぐっと楽しくなります。

仏像は単なる美術品ではなく、信仰の対象であり、それぞれが役割や願いを背負った存在です。ぜひ皆さんも、仏像のことを知り、拝観を楽しんでいただきたいです。

仏像の種類

	如来 悟りを開いているのでアクセサリーなどつけないシンプルな姿
	菩薩 悟りを開くために修行中。釈迦が王子だった頃をモデルにした冠やアクセサリーをつけた姿
	明王 如来が姿を変え(化身)怖い顔をして仏法に導く
	天 古代インドの神さまが仏教に帰依した
その他	羅漢、高僧など



【田中ひろみ氏】

イラストレーター&文筆家。奈良市観光大使。所沢在住。『ほっとする仏像図鑑(リベラル社)』『日本の仏像はじまりの地奈良の仏像115(西日本出版社)』ほか。
★最新作は『大人も知らない? 仏像のふしぎ事典(マイクロマガジン社)』★

所沢図書館児童文学講演会

このよろこびを あのに



子どもに本を手渡すこと 講師 小宮由氏

令和7年12月7日(日) 会場 所沢図書館本館3階集会室

絵本にとって大事なものは？

絵本にとって、絵と文、どちらが大事なのでしょうか。どちらも大事だと思われる方もいるかもしれませんが、あえて選ぶとしたら「文」です。子どもは大人に比べて人生経験がまだ乏しいので、文字や聞くだけでは内容をよく理解できません。もちろん絵本の「絵」も大切で、物語をよりよく理解してもらうために、「絵」はあるのです。

また、絵本における子どもが思いと思う絵と、大人が思いと思う絵は違うということもポイントです。大人にとっていい絵とは何でしょうか。色使いでしょうか、構図でしょうか。でも、それらの意見のほとんどが、大人が思いと思う価値観なのです。絵本の絵の良し悪しを見定めるには、その絵が文章に忠実であるかどうか、その

絵が文章を補完するだけでなく、それ以上の想像力をかき立ててくれているかのどちらも満たしていることが大切です。

絵本にとって優れたお話は何か

「本は読んだ方がいい、子どもに本を読み聞かせた方がいい」とよく言われます。これについて考えていると、「どうして私は子どもの本を作っているのか」という根本的な疑問が湧いてしまいました。その理由を明らかにすることで、

「絵本にとって優れたお話は何か」の答えにたどり着けるのではないかと考えました。私は、自分が作る絵本で2つのことを子どもたちに伝えたいと思います。1つが、「人の喜びを我が喜びとし、人の悲しみを我が悲しみとすること」。もう1つは、「幸せとは何かを伝える」ということです。

「人の喜びを我が喜びとし、人の悲しみを我が悲しみとすること」とはどういうことか。簡単に言えば、相手の気持ちがわかるということです。絵本を読んでもあげているとき、子どもはどのような状態にあるでしょうか。子どもは絵本の主人公(他)になりきって、ファンタジーの世界に入り、嬉しかったり、悲しかったり、楽しかったり、辛かったり、実生活ではなかなか味わえないような感情を、我が事のように体験します。感情だけではなく、時代や国境、言語、文化、習慣も超えて、行ったこと、見たこともない場所での出来事までも絵本は体験させてくれます。そして、いろんな他になつて、物語を通して自分の心の中に他の心をもろうという営みです。

絵本を読んで、他の心をたくさん持つていけば、いろんな立場、いろんな境遇の、自分ではない他を理解することができるのではないのでしょうか。もし、目の前で誰かが悲しんでいけば、我が事のようにならなければ、我が事のように喜んでくれるのではないのでしょうか。

私は、絵本をたくさん読んで楽しめば、きっとそんな心の優しい人間が育つと思います。そう考えると、本を与える側の大人の責任がいかに重いかわかることがわかります。どの本を子どもに出会わせるかという私たちの本の選択、いわゆる選書という行為は、その子にどんな人生観、どんな価値観を備えてほしいのか、どんな大人になつてほしいのかというこの選択に他ならないと私は思えるのです。



私はそもそも絵本とは関係なく、大人が子どもに、何が人間にとっての幸せかということのを伝えるというの、子どもに対する罪だと思っています。「あなたの幸せとは何？」と聞いて浮かんだものは、大人になってから生み出された幸せの価値観ではないでしょうか。その幸せは、幼い子が思いつく、または発想できる幸せでしょうか。大人になってしまうと、子どもは何をもって幸せとしていたかを忘れ、自分の今思っている幸せが子どもにとっても幸せと思い込んでしまします。絵本の読み手が子どもであっても、絵本を作るのは大人ですから、大人の価値観による幸せの絵本が多くなって、幸せのミスマッチが起きてしまうのです。

どうして私は子どもの本を作っているのか

「絵本にとって優れたお話とは何か」ということについてお話ししました。まずは、「人の喜びを我が喜びとし、人の悲しみを我が悲しみとすること」、2つ目に「幸せとは何かを伝える」です。いろんな他に触れることで、他の生き方

や考え方を自分の中に取り込んでいき、他から多様な理想をもらい受けることで、心が豊かになります。それはすなわち、「自分にとっての幸せとは何か」という価値観を形成していくことです。ここで形成されたものはきつと、その子の一生を支えていく生きる力、核になります。それこそが皆さんが子どもたちに手渡そうとしている本の力、文学の力です。「どうして私は子どもの本を作っているのか」ということの答えは、私が作る本によって、読者にその理解を深めてもらいたいということだったのです。

絵本から読み物へ



経験の多さ少なさはあれ、ほとんどの子どもたちは、絵本を大人に読んでもらったことがあると思います。

ところが、絵本よりも上の読みものとなると、読んでもらった子とそうでない子のその差が開いてきます。特に小学校に上がると、誰か大人に読んでもらうという機会が極端に少なくなります。

また、読む側の大人も、何を読

ませたらいいか分からなくなりま。絵本なら、パラパラと見て、ある程度判断できますが、読み物となるとパラパラと見ただけでは内容はわかりません。子どもに好きな本を選ばせ読まないよりいいかと、そのままにしてしまうと、本の真の喜びを知らないまま、本から離れていってしまいます。

読書に関しては、どんな子どもにも共通する方程式みたいなものはなく、その子にとって、どの本が本の喜びを知るスイッチになるかはわからないのですが、絵本から読み物へ移行させるためには、2つのポイントがあります。

1つ目は、子どもに本を手渡す私たち大人が、あらゆる種類の楽しい本を知っておかなければならないということです。本をたくさん楽しんで、ご自身の喜びのスイッチとなる本をたくさん蓄えておいてほしい。大事なのは、この本の喜びをあの子に伝えたいという本来、人間が持つ自然発生的な気持ちです。

2つ目は、絵本の次に読むといとされている幼年文学と言われるジャンルです。絵本から読み物

への橋渡し役であるこのジャンルの本で、いいものが揃ってくれば、子どもを本好きにさせる確率が少しは上がると思います。私が幼年文学の何をもって翻訳しているのか、その判断基準を知ってもらって、今後の選書にいかしてもらえたらと思います。

よい幼年文学のポイント

私の考える、絵本から読み物へステップアップさせやすい幼年文学の特徴は3つあります。

1つ目は、登場人物の心理描写がほとんど描かれていないということです。本の書き手というものは、つい良かれと思い、「嬉しい」とか「悲しい」といった登場人物の感情を丁寧に書いてしまい、その上自然描写を加えたりして、その場の空気感さえも伝えようとしてしまします。大人と比べて体験の乏しい子どもにとって、そういった感情や自然描写はまだうまく理解できません。そのため、集中力が途切れて本を読むことを途中で投げ出してしまい、本ってつまらないということになってしまいます。大事なのは、登場人物の

感情などは読み手の感性に任せて、話の筋で読者をグイグイと引っ張っていくことです。

2つ目は、話が順序よく積み上がり、分かりやすく展開していくということ。逆に、話が戻ってしまったり、話の筋道が急にそれたり、複雑な伏線があったり、場面が急に変わったりすると、やはり集中力が削がれてしまいます。

3つ目は、話の展開が先に分かるといことです。話の序盤に、何かしらの出来事やセリフで、読者に「次はこうなりそうだな」と予感・期待させたりすることです。序盤に事件が起きず、しばらく読み進めないと物語が動き出さないような本は、やっぱり子どもの集中力を途切れさせてしまいます。

この3つの特徴を併せ持つ物語こそが、絵本から読み物へステップアップさせやすい幼年文学で、子どもの集中力を途切れさせない本ということ。本を読むという行為は、鉄棒を練習するのと同じで、ある程度の慣れや鍛錬というもの。どうしても必要となります。その鍛錬への第一歩として重要なのは、集中力を途切れさせない

いことなのです。

昔話との共通点

この3つのポイントは、実は昔話の特徴と一緒です。

1つ目の「登場人物の心理描写がほとんど描かれてない」というのは、昔話と同じです。昔話はずっと文字も絵も持たない口承文芸です。話の途中で「嬉しかった」「悲しかった」と登場人物の気持ちを細かく語っていたら、語り手のリズムが崩れるうえ、聞き手の集中力も途切れしてしまいます。感情の描写があるとすれば、昔話の場合、悲しい場合は「泣いた」、嬉しい場合は「笑った」などと目に見えるような形で表現されています。

2つ目の「物語が段階的に進んでいく」ということも、昔話と一緒です。本であれば、ページを戻って読み返すこともできますが、昔話を聞くことは、聞き返すことはできません。話が前後したり、話の口がそれたりすると、聞き手は話の本質を見失ってしまいます。

3つ目の「話の展開を先にばら

す」というのは、これは昔話の手法という先取りの様式というものです。昔話はどれもほぼ例外なくこの法則を活用しており、これからどういう事件が起こるのかというのをあらかじめ聞き手にばらしてしまふのです。

例えば「警告と禁止」という手法を使った代表的な作品は、グリム童話の「おおかみと七ひきの子やぎ」です。このお話では序盤にお母さんやぎが子やぎたちにおおかみに対する警告と禁止を伝えます。これによって読者は、「これからおおかみが出てきて、子やぎたちは食べられてしまふのかな？」とこれからの展開を先取りできます。

これにより語り手と聞き手が同じ展開を共有でき、場に一体感が生まれ、聞き手の集中力を継続させることができます。言い換えると物語に参加させることができます。まだ集中力が弱く、先を見通す力に欠けている子どもにとって、この様式は大変有効で、同時に昔話を聞くことによって集中力を養うこともできます。その結果、少しずつ長いお話を楽しむことができます。

きるようになります。

どうやったら本に興味を持ってくれるかと悩んでいる方は、この3つの点を押さえた幼年文学の本を手渡すといいのではないのでしょうか。



こみや
小宮 由氏

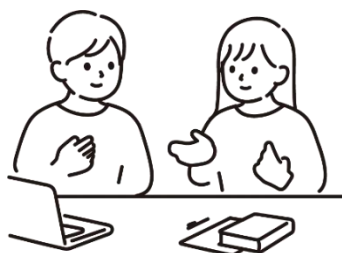
1974年、東京都生まれ。翻訳家。2004年より、東京・阿佐ヶ谷にて家庭文庫「このあの文庫」主宰。訳書に『パインさんのごちゃまぜかんぱん』（大日本図書）、『白雪姫と七人の小人』（瑞雲舎）、『怪談 こわくて不思議な10の話』（KTC 中央出版）などがある。

対面朗読をご存じですか？

所沢図書館 対面朗読担当より

対面朗読とは、身体的な理由により活字を読むことが困難な方を対象に、利用者が希望する本や新聞、雑誌などを、ボランティア（朗読者）が、一対一で対面して読み上げるサービスです。

対面で読み上げるので、利用者のペースに合わせて読むスピードを調整できたり、気になる部分を繰り返し読んだり、その場で言葉の意味と一緒に調べたりと柔軟に対応できるのが特徴です。疑問に思ったことを朗読者に尋ねられることや、コミュニケーションをとりながら進められることも対面朗読の大きな魅力です。



【対面朗読室】

所沢図書館では、所沢市内にお住まいの方、または通勤・通学している方で、障害者手帳（視覚障害）をお持ちの方に、対面朗読を行っています。お問合せは所沢図書館対面朗読担当までお願いいたします。

所沢市立所沢図書館は、これから多くの方が読書を楽しめる図書館を目指してまいります。

【朗読者】

朗読者は、専門講座を受講の上、図書館の活動に協力をいただいている方々です。利用者のリクエストに応じた本の朗読に対応できるよう、高度なスキルを求められます。朗読者さんからの声の一部を紹介します。



【朗読者さん】

利用者の方に喜んでもらえるのがやがいがいい。

対面朗読での利用者との出会いがかけがえのないものとなっている。

自分の知らない世界に出会える。小説などは、どんな本なのだろうとわくわくする。

目の不自由な子どもたちにも朗読したいという希望もある。

【利用者】

利用者は「見えない・見えにくい」方です。デイジー図書などの音訳図書の普及により、読書のバリアフリー化は進みました。しかし、最新の本や調査研究の本、楽譜等は音訳されていないこともあります。利用者さんからの声の一部を紹介します。



【利用者さん】

ループを使用して読書をしている時に比べると対面朗読は楽で、頭に入ってくるところがよい。

本、読書を通じて人との触れ合いが生まれる。

朗読者の方それぞれの読む個性を通して、読書の楽しさを感じている。

卒論を書くときに音声化された資料がなくなっても苦労した。

もっと早く対面朗読の存在を知りたかった。

図書館長のつぶやき

所沢市立所沢図書館長 中村まさみ



こどもの頃、「ああ、もう、どこかに、かくれてしまいたい」と思ったことはありませんか？

怒っている大人や難しい問題、不安な気持ち、くやしいことや悲しいこと、おっかないことから離れて、ひっそりと安心できる場所で、「ほうっ」とため息をついたことはないでしょうか？

小さな私は、苦手なものから逃れて、よく和室の押し入れにいました。別にお仕置されていたわけではありませんが、そこが楽しくて、心穏やかにいられる場所だったのです。

お気に入りの本を抱えて、押し入れの上の段に入り込み、懐中電灯を点ければ、そこはもう無人島の洞穴です。ぼんやりとした明かりの中で、『あおい目のこねこ』や『やかまし村の子どもたち』、『二年間の休暇』を読んで、わくわくしていました。

おかげで、すっかりメガネとお友達になってしまったので、大人の私からは、かくれる場所として、押し入れはお勧めいたしません。

「ただろう？」そう思われた方もいらっ

しやいますよね。そうです。時代は昭和でしたので、ベッドではなく、布団で寝ている家がほとんどでした。狙い目は、晴れた日に布団を干しているときや、夕方になって布団を敷いた後でした。

さて、押し入れはともかく、どこかで少しだけため息をつきたいとき、煩わしいものから少しだけ離れたいとき、図書館を活用していただくという取り組みを始めました。

「所沢図書館かくれがプロジェクト」です。

図書館は、どなたでも気軽に、安心してご利用いただける場所です。

おひとりでも、どなたかと一緒に本を読んでもいいし、読まなくてもいい。調べものをして、何かを学習してもいい。面白そうだと思うたら、イベントに参加してもいいし、なんにもしなくてもいい……。

そんな図書館を、皆様の「かくれが（＝居場所）」にしてみませんか。強張っていた心と体が、和らぐかもしれません。

図書館公式SNS

所沢市立所沢図書館の公式SNS(X、Facebook、Instagram)にて情報発信中！



アカウント名：【公式】所沢市立所沢図書館
ID : toko_library

↓↓SNSでは、以下の情報をお届けしています↓↓

- ★おはなし会・講演・講座などのイベント情報
- ★ブックリスト・今月の図書館・パスファインダー等の発行情報
- ★その他図書館に関する様々な情報

ぜひ、フォローして図書館ご利用の際にお役立てください！



X (旧 Twitter)



Instagram



Facebook



編集発行：所沢市立所沢図書館 〒359-0042 所沢市並木 1-13

～ ホームページアドレス ～

パソコン <https://www.tokorozawa-library.jp/>

スマートフォン <https://www.tokorozawa-library.jp/opw/OPS/OPSINDEX.CSP>

～ 電話 / FAX ～

本館	04-2995-6311 / 04-2992-1421	富岡分館	04-2943-3636 / 04-2943-6680
所沢分館	04-2923-1243 / 04-2928-8195	吾妻分館	04-2924-0249 / 04-2928-8250
椿峰分館	04-2924-8041 / 04-2928-8148	柳瀬分館	04-2944-4023 / 04-2945-7236
狭山ヶ丘分館	04-2949-1193 / 04-2949-8577	新所沢分館	04-2929-1905 / 04-2929-1906
松井小学校図書館 04-2992-2796 / 04-2992-2797			

2026年9月30日発行 復刊いずみ40号 (通巻118号)